

*The Journal of  
Nagasaki University of Foreign Studies  
No. 17 2013*

プロテスタント宣教師

－幕末、明治、そして長崎－

加 島 巧

Protestant Missionaries:  
End of the Edo Period, Meiji Period and Nagasaki

KASHIMA Takumi

長崎外大論叢

第17号  
(別冊)

長崎外国語大学  
2013年12月

# プロテスタント宣教師 －幕末、明治、そして長崎－

加 島 巧

## Protestant Missionaries: End of the Edo Period, Meiji Period and Nagasaki

KASHIMA Takumi

### Abstract

The year 1959 was the 100th year since the first protestant missionaries came to Japan. The Nagasaki Christian Council held an extraordinary general assembly. In the Council, they decided that they would hold a centennial celebration ceremony and established a preparatory committee.

The history of the protestant missionaries began in 1859, when six protestant missionaries landed in Japan from America. John Liggins came to Nagasaki in May., in June, Channing Moore Williams came to Nagasaki. They were sent from the Episcopal Church. James Curtis Hepburn, a Presbyterian, landed at Kanagawa in October. The Reformed Church in America sent three missionaries. Guido Herman Fridolin Verbeck to Nagasaki, and Samuel Robins Brown and Duane B. Simmons to Kanagawa.

These protestant missionaries helped Japan to absorb information from the English speaking world. In this paper, the author describes the situation surrounding Japan and these missionaries at that time.

キーワード：幕末から明治、プロテスタント宣教師、長崎

### 1. 序

1959年はプロテスタント主義の団体にとっては、記念すべき年であった。日本でキリスト教の布教が始まって100周年を祝う年であった。長崎では、この年の7月20日に長崎キリスト教協議会臨時総会が開かれる。その会では、宣教100年記念行事開催を決議し、遠山茂<sup>1</sup>、岡正治<sup>2</sup>、後藤光敏<sup>3</sup>、東道男<sup>4</sup>、松藤守男<sup>5</sup>の5名が準備委員として選ばれた。8月24日には準備委員会が開かれ、「日本宣教百年記念長崎地方大会」を10月10日夜7時から浜口町にある国際文化会館で開くことや、大会役員等が決定された。大会役員に選ばれた中には、青山武雄<sup>6</sup>や古屋野宏平<sup>7</sup>の二名の名前も見ることが出来る。<sup>8</sup>

1959年に宣教100年記念を行ったということは、100年前の1859年にプロテスタントの宣教師が来日したことを意味する。そして、それはその年にアメリカから日本にやって来た6人の宣教師から始まったのである。プロテスタント主義のキリスト教の歴史は長崎から始まる。まず、5月に長崎に上陸したのはジョン・リギンズ (John Liggins : 1829-1912) であった。次に、6月にチャニング・ムーア・ウィリアムズ (Channing Moore Williams : 1829-1910) が来る。二人は聖公会に属していた。二人は崇福寺内の広徳庵に居を構える。そして、10月には長老派がジェームズ・カーチス・ヘボン (James Curtis Hepburn : 1815-1911) を神奈川に送る。オランダ改革派は3名を派遣する。グイド・フルベッ

キ (Guido Herman Fridolin Verbeck : 1830-1898) は長崎に。サミュエル・ブラウン (Samuel Robins Brown : 1810-1880) とデュアン・シモンズ (Duane B. Simmons : 1834-1889) は神奈川へ向かった。この6名が来日した年が1859年であった。

これを機に、日本は蘭学から英学に大きく舵を切った。特に長崎は英学発祥の地と言って良い。この小論では、蘭学から英学に方向転換する幕末から明治で、大きな役割を演じる事となるプロテスタント宣教師の姿を述べることにする。

## 2. アメリカから上海

フルベッキと S. R. ブラウン、D. シモンズの3名は1859年5月7日にニューヨークを離れる。ジャワのアンジアに着くのが7月28日。8月23日から9月27日までは香港に留まり、上海に到着したのはニューヨークを離れて163日目の10月17日であった。フルベッキは身重の妻を連れていた。同行者がいたとはいえ、海外伝道に行くには、相当の覚悟が必要であったことは想像に難くない。歴史学者アーノルド・トインビー (Arnold Joseph Toynbee : 1889-1975) は、1960-61年にペンシルベニア大学歴史学部に滞在した。そしてその間に3回の特別講義を行った。「アメリカ帝国主義の道」と題する講義の中で、宣教師の私心のない姿と困難さを次のように語っている。

初期における海外進出アメリカ人は、外交官でもなく、領事でもなく、実業人でもなかった。彼等はキリスト教伝道者だったのである。もちろん、伝道者といえども、他の職業の男女と同様、彼らのすべてが完全な模範的人物ではない。しかし、大体において、海外のアメリカ人の活躍舞台における民間先駆者らは、私欲のない使命に献身奉仕するために、自国で財産をきざきあげる機会を放棄した男女であった。彼らは自己を犠牲にしたのである。彼らの物質的生活水準は低かった。従って、彼らが働いた土地の住民との差も大きくはなかったのである。

(中略)

私はかつて、満州の遠方の辺地にむかうアメリカ人伝道者らの一団が、彼らの妻と子供たちに、ながの別れを告げる場面に居あわせたことがある。母親たちは、それぞれ子どもたちを、教育のために故国につれて行くのであった。家族らが再会するのは、何年も先のことであっただろう。それは感動的な光景であり、三十一年前目撃したときと同じようにはっきりと私の記憶に残っているのだ。

私は彼らの別離の悲しさとそれに耐えている不屈の精神に感動した。そのアメリカ人家族らを、それほどの試練に耐えさせている信仰の力に、なによりも、わたしは感動した。<sup>9</sup>

船内の様子は、フルベッキが改革派教会外国伝道局主事アイザック・フェリス (Isaac Ferris : 1798-1873) に宛て長崎から出した1860年1月14日付の手紙に触れているが、ここでは、S. R. ブラウンの書簡から見ることにする。この手紙はアンジア (アニュエール) 到着前、船はジャワ岬の海を航海している時に書かれた。日本語の勉強の様子と礼拝の様子がよりフルベッキよりも詳しく書かれている。

航海しているわたしたちの仲間は、たいへん親しく、ケビンにいるもの総数18名、お互いに仲

よくしようと務めてきました。船長も船員も紳士的でなごやかで、昔わたしたちが航海した時の船の人々よりも<sup>10</sup>、はるかに、親切でりっぱです。<sup>11</sup>船酔いもおさまったので、かなり綿密な日課のプランをたて、これを励行することにしました。午前9時、日本語の勉強をすることにして、わたしが指導者となって、クラスを編成しました。たまたま、手許にあった日本語の単語集と植物の本を手びきにして、みんなは、ほぼ250語を暗記し、かたかなで、日本字が書けるようになりました。フルベッキ氏はオランダ語を教えたので、みんなも、少しばかり、オランダ語で、話したり読んだりすることができるようになりました。

(中略)

ニューヨークを出てから、二度ばかり休みましたが、だいたい、天候のゆるすかぎり、礼拝は後甲板で行い、船員のほとんど全部が出席しています。フルベッキ氏とわたしは、最初の安息日は例外として午後のはかわるがわる説教をしてきました。安息日には、午前10時に、平日は毎晩7時に、船室で礼拝を行い、聖書を読み、讃美歌をうたい、お祈りをします。

航海が終りに近づくにつれて、これから働く伝道地に思いをはせ、わたしたちの双肩にかかっている責任の重大さを、いっそう、深く感じています。新しい伝道地に関し、何も予備知識をもたずに出発したのです。どこにおちついてよいか、長崎か、または江戸に近い神奈川か、自分で決定しなければなりません。この秋に、その神奈川に行けるかどうか、疑問です。もし行かれなければ、長崎でがまんしなければなりません。はたして日本政府がその海岸でわたしたちを宣教師として迎えてくれるだろうか、将来のことを考えるといろいろと疑問が生じてきます。こうした不安の中で、わたしは、日々、次のように祈りました。

「おお、主よ、どうぞ道をひらき、日本人が我らを受けいれ、あの新しく開国したばかりの帝国に福音宣教の道を備えたまわんことを」と。<sup>12</sup>

### 3. 上海

上海に到着するのは1859年10月17日の事であるが、到着三日後の20日に、フルベッキらはサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ (Samuel Wells Williams : 1812-1884)、米艦ポーハタン号 (Powhatan) のヘンリー・ウッド (Henry Wood : 1796-1873) <sup>13</sup>、上海在住のエドワード・W. サイル (Edward W. Syle : 1812-1890) にブリッジマン (Elijah Coleman Bridgman : 1801-1861) の家で会う。<sup>14</sup>

上海でフルベッキらがS. W. ウィリアムズらと会ったことは、これから赴く日本についての情報を収集する点では大きなものがあつた。特に、H. ウッドとの邂逅は貴重であつたと思われる。S. W. ウィリアムズは1837年のモリソン号事件に関わる人物で、その後1853年54年のペリー来航の折には、首席通訳をつとめた。

日米修好通商条約は1858年7月28日 (安政5年6月19日) に神奈川沖に停泊中の米国軍艦ポーハタン号船上で締結されるが、その第8条は、次のように記され、翌年1859年7月4日から実施されることとなった。

日本に在るアメリカ人自ら其国の宗法を念し礼拝堂を居留場の内に置も障りなし並に其建物を破壊しアメリカ人宗法を自ら念するを妨る事なしアメリカ人日本人の堂宮を毀傷する事なく又決して日本神仏の礼拝を妨け神体仏像を毀る事あるへからす双方の人民互に宗旨に付ての争論あるへ

からす日本長崎役所に於て踏絵の仕来は既に廃せり<sup>15</sup>

その一月後に、船は長崎に向かう。長崎の語学伝習所はこの頃、英語伝習所と改称し、本学的な英語教育が始まることとなる。1858年9月に長崎に来航したポーハタン号附牧師 H. ウッドが英語伝習所の蘭通詞に英語を教えることとなった。ちょうどその頃上海から長崎に来ていた聖公会の E. W. サイルが、長崎奉行の希望で英語教師になる話も起っていたが、それは実現しなかった。<sup>16</sup>H. ウッドは約二ヵ月、最初は船上で、後に上陸し、ロシア交易場にある建物で教えた。ロシア交易場は、出島と市街を結ぶ石橋を渡り、広い通りを四分の一マイル進んで右に曲がり半マイル行ったところにあった。<sup>17</sup>E. W. サイルと共に S. W. ウィリアムズも長崎に来ていた。<sup>18</sup>この3名とフルベッキらは翌年上海で後に会う事になるのである。長崎で S. W. ウィリアムズは、E. W. サイル、H. ウッドの3名は、オランダ商館長ドンケル・クルチウス (Jan Hendrik Donker Curtius : 1813-1879オランダ商館長 : 1852-1860) と会ったことにより、伝道者を日本に送るべきだという主旨の文書をアメリカに送ることになる。それにまず応じたのが聖公会で、序に述べた J. リギンズと C. ウィリアムズの二人を送ることとなった。しかし、より大事なことは、英語教師として長崎に滞在することが出来る事を知ったことではなかろうか。<sup>19</sup>

香港滞在中は同地に居住している英米宣教師の友情あふれる歓待をうけ、またそれらの家庭に迎えられました。しかし、将来わたしたちの行き先の日本の案内についての知識は得られず、むしろ失望しましたが、日本への旅の最後の地である港、上海に来てから、必要な情報をすっかり得ました。まったくこの点では、こんなにつごうよくいくのははじめてです。また、ある夕べ、ある家で、親しい同労者たちに会ったのも摂理です。これらの人々は、お互い何の関係もなく、また、面識もなかったのですが、手紙で、少なからず、わたしたちの日本ミッションを実現させるのに役立った方々なのです。すなわち、10月20日、到着後3日目にブリッジマン博士の家で、S. W. ウィリアム師、米艦ポーハタン号の H. ウッド師、E. W. サイル師にあったのです。このサイル師だけが上海に居住している人です。これら三人はどの旅行者よりも、よく日本人を知り、また日本人と親交があった人々で、ここで、色々の機会や場所で会った人々のうちでもこれ以上信頼できる情報と指示を与えてくれる方はいないでしょう。<sup>20</sup>

S. R. ブラウンと D. シモンズの二人は神奈川に向かうこととなり、10月21日に上海を発つ。G. フルベッキは身重の妻を上海に置き、長崎に向かうこととなった。H. ウッドの紹介状を持って。<sup>21</sup>

アメリカの3つの伝道協会が S. W. ウィリアムズ、E. W. サイル、H. ウッド3名からの宣教師を派遣するようという手紙を認めたのは、1858年9月に長崎でドンケル・クルチウスとの会談がきっかけとなったのだが、その件については、S. W. ウィリアムズは1858年9月24日付の妻あての書簡に次のように記録を残している。

「オランダの使節、ドンケル・クルチウスは、日本との条約を調印したばかりであった。会ったときの彼の口に出た言葉が、大変印象深かった。日本側の役人たちが、クルチウスに述べたところによると、アヘンとキリスト教の進出さえ、日本から排除できるのであれば、彼らとしては、



外国人の要求する全ての貿易権益を許す気持ちでいる、というのである。そのときの日本訪問時に、(ミネソタ号に同乗してきたのであるが)、長崎には二人の牧師がいた。サイル牧師とヘンリー・ウッド従軍牧師である。そこで僕たち3人は、相談をして、それぞれ所属する母国の伝道協会本部に書信を送ることにした。米国聖公会、米国オランダ改革派教会、長老派教会の伝道協会に宛てて、日本に派遣する宣教師を任命するように促したわけである。真のキリスト教とはどんなものか、日本の人たちに教えられる点が、任命にあたって大切な事柄であるとした。それから1年も経過しないうちに、実際に、3つの伝道協会から、それぞれ派遣してきた代表を上海で迎えられて、みんなで喜び合った。」<sup>22</sup>

#### 4. モリソン号事件<sup>23</sup>

ここで、モリソン号事件について書く。1832年10月宝順丸という船が鳥羽から江戸に向かった。途中暴風に遭い、漂流することとなった。13名の乗組員は、14か月の漂流の後、アメリカ西海岸に到着した時には、音吉（後に John Matthew Ottoson と名乗る：1819-1867、岩吉（1807-1852）、久吉の3名となっていた。宝順丸の14か月に及ぶ漂流についての記録は残っていないが、これより20年前の1813年に江戸からの帰りに遠州灘を航海していた尾張の督乗丸は15か月に及ぶ漂流について克明な記録を残している。1815年にカリフォルニア沖でイギリス船に救助された時には、14名いた乗組員は3名になっていた。督乗丸の残した記録から、宝順丸も壮絶な漂流生活を送ったことが想像される。<sup>24</sup>

宝順丸の3名はインディアンに救助されたものの待遇はひどいものであった。後に、イギリス人に救出され、ロンドンに渡る。3人を乗せた船はそれからマカオに向かう事となった。マカオでドイツ人宣教師カール・ギュツラフ（Karl Friedrich Augustus Gützlaff：1803-1851）に預けられる。そこで、音吉らは、聖書の日本語訳を行うこととなり、『ギュツラフ訳聖書』<sup>25</sup>を完成させることとなった。S. W. ウィリアムズもギュツラフの下にいる3名の日本人のことを1836年6月25日付の手紙に認めている。（宛先は不明）

「ギュツラフ氏の家に、今、3人の日本人が暮しています。彼らは、コロンビア川からロンドンを經由して、当地へ連れてこられましたが、現在、広東駐在英國商務庁の生活支援を受けています。3人のなかの1人は久吉〔Koekitch〕と言い、本日、使いの用事で僕のところへ来ました。たどたどしい英語を話せることが分りましたので、僕は、思い付くかぎりの質問をたくさんしてみました。」<sup>26</sup>

そこに4名の日本人が加わることとなった。1835年天草を出帆した八十石積の船は長崎に向かう途中嵐にあり、フィリピンのルソン島に漂着したのであった。肥後出身の船頭の庄蔵と水夫の寿三郎、そして肥前出身の熊太郎、力松の計4名であった。1837年7月にギュツラフとS. W. ウィリアムズは音吉ら3名と薩摩の漂流民4名を乗せ、彼等を日本に送り返すためにオリファント商会の船モリソン号で浦賀と鹿児島に向かった。出発前S. W. ウィリアムズは楽観的であった。彼は1837年7月2日付で手紙を父親に出す。

「明日、マカオを発って、日本へ小旅行にでかける予定です。例のお馴染みのモリソン号で参り

ますが、同行者は、キング [Charles William King : 1809-1845] 氏夫妻、それにパーカー医師です。ギュツラフは、前もって琉球に向け、英国軍艦のラーレーで出発しております。今回の計画は、難破した日本人の船乗りたちの1団を送り届けることにあります。彼等は、神の御旨によって、マカオの僕たちの手に委ねられた人たちです。」

「彼ら日本人漂流民から、ギュツラフは、すでに或る程度の日本語を習得しました。どんなことでも大抵の話題は、日本語で会話できるほどになりました。彼ら日本人と彼ギュツラフが同行しておりますので、先方に対しては、かなり説得力のある次のような話が出来るのではないかと期待しているところです。」<sup>27</sup>

しかし、1808年のフェートン号事件をきっかけに1825年（文政8年）に定められた「異国船無二念打払の令」によりモリソン号は砲撃され、引返すこととなった。この事件は、後に蛮社の獄(1839年)を惹き起すこととなる。

モリソン号には宣教師 S. W. ウィリアムズが乗っていた。そして、モリソン号はオリファント商会が所有する船であった。これは、フルベッキとも後に関係のあることである。日本からアメリカに送った書簡にもたびたび出てくる名前なのである。<sup>28</sup>S. W. ウィリアムズはアメリカン・ボードから中国伝道の印刷担当者として派遣され、広州に到着したのが1833年10月で、米宣教師ブリッジマンが創刊した月刊誌「中国叢報」(Chinese Repository) の印刷を行うこととなる。後にマカオに移り、刊行を停止する1851年12月までその仕事を続けていた。彼が広州に渡って来た時も、オリファント商会のモリソン号に乗って来た。商会は教会も建て、無償で宣教師達に貸与していた。かように多くの便宜を基督教に対して与えていた。このオリファント商会は、デヴィッド・オリファント (David Washington Cincinnatus Olyphant : 1789-1851) が1828年に広州とニューヨークに設立した。彼は、熱心な長老派プロテスタントでアメリカ人宣教師のためにアメリカー中国間の渡航費や一年間の経済援助を行っている。それによりブリッジマンやウィリアムズは渡って来るのである。ほとんどの貿易会社がアヘンを扱ったのに対し、オリファント商会の創業者はそれを行わなかった。<sup>29</sup>デビッドの後には、息子のロバート・モリソン・オリファント (Robert Morrison Olyphant : 1824-1918) が会社を継ぎ、業績を伸ばす。<sup>30</sup>後に、ペルーが中国との太平洋横断汽船行路を開設しようとした際に選んだ船会社はオリファント商会であった。(そしてオリファント商会は1878年にペルーシア号事件<sup>31</sup>というスキャンダルに巻き込まれ、その年の末に倒産してしまう。) S. W. ウィリアムズが中国を最終的に去るにあたり、デビッド・オリファントについて1835年8月20日付で R. アンダーソンという牧師に次のような手紙を広東から出した。

「米国人による中国伝道は、1829年にさかのぼるが、オリファント氏の勧めによってスタートした。とてつもなく多額の費用を必要とし、成功の予兆が微かなときでも、彼は、支援と激励を惜しまなかった。彼と彼の共同経営者たちは、約13年もの間、伝道者のために、無料で広東の商館を提供してくれた。」

「オリファント氏の所属するニューヨークの教会は、1832年に彼の勧めを受けて、印刷所一式を寄贈して送ってきた。ブルーエン印刷所と呼ぶことになったものである。『中国叢報』のスタートに伴い、財政的にこの出版事業が、失敗と分かってくると、米国伝道協会の基金に負担をかけ

るよりも、自分の方で出版費用の損失を穴埋めしたいと申し出ている。オリファント氏が広東に用意した建物に、この印刷所は、24年間、世話になっている。」

「中国に往来する宣教師たちとその家族、合わせて51名分の渡航費について、オリファント氏の会社所属の船は、無料扱いにしてきた。良き奉仕活動が全身するのであれば、同氏による慈悲の行為は、以上に触れた以外にも、つねに快く提供されてきた。このような人物の思い出は、神の祝福を受けるのに値する。また、その奉仕の仕事は、死後にも前進する。」<sup>32</sup>

若い頃フルベッキは宣教師カール・ギュツラフと接触したことがある。ギュツラフは1803年にプロシアのポメラニアで生まれる。ベルリンのヤニック宣教師養成学校で学ぶ。19歳の時である。3年後の1823年にオランダ海外伝道会に入会。正式な宣教師となった1823年にオランダからバタビアに向かった。そこには5年前からロンドン伝道会の H. W. メドハースト (Walter Henry Medhurst : 1796-1857) がいた。彼は、『英和・和英辞典』を1830年に刊行したことで知られている。ギュツラフはロンドン伝道会に変わり、ロンドンからマカオに送られて来た宝順丸乗組員3名の協力を得て、1837年に最初の邦訳聖書を出版する。1849年には欧州を訪れるが、その時にフルベッキは彼の講演を聞くこととなる。フルベッキは1830年(天保元年)オランダのツァイストで生まれた。ギュツラフの話を聞いた後、1852年フルベッキはアメリカに渡ることとなった。

## 5. 上海から長崎

フルベッキが長崎に到着したのは1859年11月17日の夜遅くのことであった。翌朝早速 J. リギンスと C. M. ウィリアムスに会う。住居が決まるまで、二人と同居することになるが、後に、近くの広福庵に移る。昭和34年12月25日に長崎基督教協議会が発行した『プロテスタント長崎基督教百年記念誌』の口絵にそのイラストが紹介されている。

フルベッキは長崎の第一印象を次の様にアメリカに報告した。

長崎は、わたしが見たどこよりも自然美のあらゆる要素をそなえています。自然の美について、その重要な点は、この港は日本の諸方からの船がはいって来、そこから道路が八方に広がり四方にのびているし、その道路の中には、旅行の輸送の要路にあたるところもあります。それによって、ほとんど三世紀にわたり、商品や産物が帝国のあらゆる地から、この港に流入していたのです。これを別としても、その多い人口は、宣教師の働きには、ゆたかな伝道地を提供しています。長崎の住民は外国人に丁寧で親切です。他の地でみるような、はにかんだりする態度がみじんもありません。<sup>33</sup>

とは言え、この時、フルベッキの胸に去来したものはどのようなものだったか。キリシタン禁制の高札を撤廃する「太政官布告第68号」<sup>34</sup>を明治政府が発するの1873年(明治6年)2月24日であったので、彼の残した書簡からは不安も同時に読み取れる。フルベッキより先に神奈川に上陸した S. R. ブラウンに同じであったろうが、彼はその時にヒーバー作の讃美歌214番「北のはてなる、こおりの山」(From Greenland's Icy Mountains) が胸に浮んだと記している。<sup>35</sup>



長崎で近代医学の基礎を築きあげたポンペ (Johannes Lijdius Catharinus Pompe van Meerdervoort : 1829-1909) がオランダから76日の航海の後長崎に到着するのは、フルベッキよりも2年早い1857年9月21日のことであった。彼は長崎の印象を次の様に記している。

リスボンを出発して長崎に着くまで76日の航海であった。あまりにも長い旅路などと苦情をいわなくともよかった。翌日長崎港に船を進めて、絵のように美しい長崎湾の風景を眺めたが、乗組員一同は眼前に展開する景観に、こんなにも美しい自然があるものかと見とれてうっとりしたほどであった。神ならぬ身、いかなる運命に巡り合うかもしれないことであるが、本当にここで2、3年生活することになっても悔いるところはないという気になった。いやそれどころか、私は極東地方でこれ以上美しい、落ち着いて住むことのできる場所はないと思う。<sup>36</sup>

フルベッキの後任として10年後の1869年3月11日に長崎についたヘンリー・スタウトが描く長崎の第一印象も同様なものであった。

長崎、私たちの未来の郷里はこのようなところです。すなわち、長崎は確かに気持の良い所です。この都市は湾の奥の、なだらかに傾斜した海岸にあり、縦約二マイル、横一マイルの広さがあります。名前は、二つの語つまり、ナガ（ロング）とサキ（ケープ）から来ています。もっとも、なぜこの名前になったか想像するのはむずかしいことですが。人口の概算は(というのは、彼等は信頼できる資料を持っていないのです)五〇〇〇〇～八〇〇〇〇人と考えられます。市街地は恐らく一マイル四方でしょう。ほとんどの家が平屋であることを思うと、こんなに多くの人たちがこの狭い空間にどのように詰めこまれるのか想像しがたいことです。

市の周辺は本当に絶景です。まわりはすべてなだらかに傾斜した丘に取り囲まれています。その丘を背景にして、港の奥に長崎市があり、狭い谷が内陸に向かって開けています。(中略)

港はいつも活気を呈していて、おびただしい数の日本の船が——私たちはジャンクと呼びますが——市に近い港の奥に碇をおろしています。他にも多くの船が出入りしています。彼の小舟は、いつもいろいろな方向に動きまわっています。

(中略)

この港が外国人のために開港されて間もなく、外国人が日本人の町に住むことを禁じられました。市の学校で教えていたフルベッキ氏は例外です。そしてこの例外は、フルベッキ氏の後継者である私にも認められました。外国人は、長崎のすぐ後ろにある大浦と呼ばれている土地と、有名な古いオランダ商館のある出島に住み、そこで商売をしています。大浦は商売をするには都合のよい所にあつて、活発な忙しい小さな町です。しかし出島については、アーヴィング作の、ハドソン河辺に住むオランダ人の幽霊物語を思い出させる何かがあるように思えます。<sup>37</sup>巨大な倉庫の間の狭い路地を歩いていると足音がこだまして振り向かないでおれなくなり、誰か年老いたオランダ人の幽霊が半開きになった窓の格子からじっと見つめているのではないか、あるいは突然巨大な鉄の扉の一つを開いて目の前の道に現われてノッシノッシと歩くのではないかと思わず見回してしまうのです。<sup>38</sup>

## 6. 捕鯨船

1853年、1854年のペリー来航で鎖国に終止符が打たれたとすれば、それは、とりもなおさず近代日本の夜明けが始まったことを意味する。最後のオランダ商館長ドンケル・クルチウスが来日したのは1852年である。「別段風説書」を提出するが、この中には、ペリーが来航する計画であることも書いてあった。その後の顛末は、日本中が大混乱となり、1854年の日米和親条約締結となり、次々と他の国とも条約を結ぶこととなるのだが、ペリー来航の前に、開国の予兆は既にあった。

作家ハーマン・メルヴィル(Herman Melville: 1819-1891)は日本開国の予言を『白鯨』(*Moby-Dick, or the Whale*, 1851)の中で書いている。その主人公は捕鯨船であった。

また宣教師と商人のために道をひらき、初期の宣教師たちとしばしばその最初の目的地に運びもした捕鯨船に対して、通商の礼を尽くすだろう。もし、あの嚴重に閉鎖された国、日本が門戸を開くときがくれば、その功績を帰すべきものは捕鯨船以外にあるまい。事実、捕鯨船はすでにその戸口にまで近づいているのだ。<sup>39</sup>

315トンのマロー号(the Maro)や238トンのエセックス号(the Essex)ら17隻の捕鯨船がアメリカ東海岸のナンタケット島を出帆したのは1819年で、マウイ島を経由し、日本近海へ近づく。1822年に帰港したマロー号からの日本近海で鯨が取れるという知らせは海のゴールドラッシュを生む。<sup>40</sup>エセックス号は巨大な鯨に襲われて沈没する。『白鯨』のモデル<sup>41</sup>が生まれたわけだが、この1819年にメルヴィルが生まれる。そして宝順丸の音吉も。『白鯨』のエイハブ船長は、日本沖で片足を失うこととなる。<sup>42</sup>

ナンタケット島やニューベッドフォードは一大捕鯨基地となった。最盛期は1860年代まで続くこととなる。日本近海にはたくさんの捕鯨船が出現することとなった。北茨木市の大津浜では、1824年2隻のイギリス船が停泊し、11名の船員が上陸するという大津浜事件が起った。

日本で最初の英語教師といわれるラナルド・マクドナルド(Ranald MacDonald, 1824-1894)を北海道の利尻島に送り届けたのもプリマス号という捕鯨船であった。<sup>43</sup>時は1848年7月2日であった。マクドナルドは秋に長崎に護送され、10月11日長崎に送られ、諏訪神社近くの大悲庵に幽閉される。しかし、この時長崎には捕鯨船ラグダ号の乗組員15名がいた。内二人は死亡したが、13名とマクドナルドは1849年4月にアメリカ軍艦ブレブル号に引取られる。この七カ月の間に、マクドナルドは14名の蘭通詞に英語を教授することとなった。その中の一人森山栄之助(1820-1871)はペリー来航時の通訳を務めた。

アメリカの捕鯨は1859年にペンシルベニア州の油田の発見で急激に衰退することとなる。

## 7. 長崎

日本が明治という時代を迎えるのは、1868年のことであるので、ペリーの来航から15年後ということになる。明治時代は日本が西欧の列強国に追いつこうとした時代であるが、その近代化を進める一つの手段は外国から人材を登用することであり、もう一つは優秀な日本人を外国に留学させることであった。渡航禁止令が廃止されるのは1866年5月23日のことである。藩の中には明治という時代を待たずに外国の文化を取り入れ始めようとするところもあった。アメリカの東海岸、ニュージャージー

州ニューブランズウィックにラトガース大学という州立大学がある。この大学は、近代日本の夜明けを迎える日本にとって大きな役割を果たした。その役割とは、外国人の登用と日本人の留学である。アメリカの大学の歴史は、移民の歴史とともに始まる。ヨーロッパからの移民は東海岸に到達するので、東海岸はアメリカの大学の発祥の地となった。移民が増え、コロニーが増えるに従い、人々は聖職者を必要とした。1636年に創立されたハーバード大学も聖職者や社会のリーダーとなる人を育てる目的で全人教育を行うリベラルアーツカレッジであった。1766年の独立宣言までに設立された大学は15校。そのうち9校が現在も存続している。いずれもキリスト教の会派と深いつながりがあった。S. W. ウィリアムズは1693年設立のウィリアム・アンド・メアリー大学の卒業である。(彼はその後進学した神学校でJ. リギンスと同級生である。) ラトガースは元の名をクイーンズ・カレッジ (Queen's College) という。当時の国王ジョージ3世 (1738-1829在位1760-1820) の王妃を称えて、オランダ改革派教会が1766年に設立した。財政危機を救ったヘンリー・ラトガース (1745-1830) の名前に変更したのが1825年である。

福井の藩校明新館に理科の教師として1871年赴任するウィリアム・グリフィス (William Elliot Griffis : 1843-1928) という人物がいる。彼が、ラトガース大学を卒業するのは1869年で、福井赴任のきっかけを作ったのがフルベッキである。フルベッキはオランダ改革派伝道局主事に人選を依頼したのだ。そのグリフィスが1885年に『日本におけるラトガース卒業生』(Rutgers Graduates in Japan)<sup>44</sup>という講演を母校で行った。その講演の中でグリフィスは、幕末から明治にかけて日本に滞在したラトガースの卒業生についての紹介を行った。

それによると、幕末から明治にラトガースの卒業生で日本にやって来たのは1833年卒のロバート・プリューイン (Robert H. Pruyn : 1815-1882) から1880年卒のディマレストまで10人数えることができる。プリューインはハリスの後任となる第二代駐日公使で、アメリカでは南北戦争 (1861-1865) が起こっている最中の来日であった。10名の中で長崎と関わる者がE. ブース (Eugene Samuel Booth : 1859-1931)、N. H. ディマレスト (Nathan Henry Demarest : 1861-1917)、H. スタウト (Henry Stout : 1838-1912) の3名がいるのだが、特筆すべきは1865年卒業のヘンリー・スタウトである。スタウトが妻エリザベス (Elizabeth Provost, Mrs. Henry Stout : 1836-1902) と共に長崎来ると、フルベッキは東京へ移る。

スタウトの長崎滞在は1869年から1906年までの長きに亘る。初めは広運館で英語を教えるが、1872年にスタウト夫妻は東山手に「スチール・アカデミー」と「スタージェス・セミナリー」を開く。夫妻が長崎で蒔いたこの二粒の種は、後に前者は東山学院となり、後者は梅香崎女学校となる。それは、現在山口県下関で梅光学院大学として続いている。エリザベスは1902年に死亡するが、その亡骸は坂本の国際墓地に眠っている。ヘンリー・スタウトは1906年に帰国し、6年後に74年の生涯を閉じる。<sup>45</sup>

長崎は英学発祥の地と言ってよい。そして、それはここが幕末から明治にかけてプロテスタントキリスト教の揺籃の地でもあったことと多いに関係のあることである。

これまで1859年から切支丹禁制の高札撤廃の1873年までの、言わば、「宣教準備」の期間のことを述べてきた。この間にやってきた宣教師たちは、秘かに宣教活動は行っていたが、表向きには布教活動は出来なかったのもので、日本語研究や聖書の邦訳、そして教育活動を行ってきた。

1959年はプロテスタント宣教100周年を迎える年であった。そして、その年、一人の宣教師が九州にやって来る。彼の名は、ゴードン・レーマン (Gordon D. Laman : 1934-) と言う。最初佐賀に行



き、次に平戸に来る。彼は改革派から送られた宣教師であった。S. ブラウン、フルベッキ、D. シモンズの3名が（オランダ）改革派が日本に送った最初の宣教師達であったが、G. レーマンは彼等から数えて、複数回来日した人物を考慮しなければ、ちょうど160人目の宣教師であった。<sup>46</sup>彼は、8月に日本に到着するとすぐに日本語の勉強を始め、日本での生活や文化に慣れようとした。これは、1859年に日本にやって来た6名の最初のプロテスタント宣教師が行ったことと同じである。そして、10月、プロテスタント宣教100周年記念に出席した。G. レーマンは、これからプロテスタント宣教の二世紀目が始まることを実感した。彼の日本の滞在は、それから45年の長きに亘ることになった。<sup>47</sup>

資料 フルベッキの住んだ崇福寺広福庵  
（『プロテスタント長崎基督教百年記念誌』）



資料 長崎坂本国際墓地にあるエリザベス・スタウトの墓



## 注

- <sup>1</sup> 長崎飽之浦教会牧師（注1～7の経歴は全て当時のもの）
- <sup>2</sup> 日本福音ルーテル長崎教会牧師
- <sup>3</sup> 長崎聖三一教会司祭
- <sup>4</sup> 長崎銀屋町教会牧師
- <sup>5</sup> 長崎バプテスト教会牧師

- <sup>6</sup> 長崎外国語短期大学学長  
<sup>7</sup> 前長崎大学学長  
<sup>8</sup> 宣百記念誌刊行特別委員会（編）『プロテスタント長崎基督教百年記念誌』昭和34年 p. 48  
<sup>9</sup> アーノルド・トインビー著 黒沢英二訳『失われた自由の国』毎日新聞社昭和37年 pp. 67-69  
<sup>10</sup> 20年前の1838年10月17日 S. R. ブラウンと妻は、モリソン号で中国へ向かう。翌1839年2月19日にマカオに到着。S. W. ウィリアムズに迎えらる。モリソン記念学校校長になり、学校として使用したものは、ギュツラフの邸宅であった。モリソン記念学校の校名は、ロバート・モリソン（Robert Morrison：1782-1832）に由来する。  
<sup>11</sup> 1859年も10月20日に S. W. ウィリアムズと会う事になる。  
<sup>12</sup> 高谷道男（編・訳）『S. R. ブラウン書簡集』日本基督教団出版局1965年 pp. 10-12  
<sup>13</sup> 石原千里「ヘンリー・ウッドの英語教育—その日本英学史およびプロテスタント史における意義」『英学史研究』第19号 1987年 p. 175  
石原千里「1858年長崎におけるヘンリー・ウッドの英語教育—The New York Journal of Commerce の記事から—」『英学史研究』第33号 2001年 pp. 22-23  
<sup>14</sup> 高谷道男（編・訳）『フルベッキ書簡集』新教出版社1978年 p. 20（1860年1月14日付 アイザック・フェリス宛）  
<sup>15</sup> データベース『世界と日本』では、日本の政治や国際関係の様々なデータベースを見ることが出来る。<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/~worldjpn/documents/>（2013年9月19日）  
<sup>16</sup> 重久篤太郎著『日本近世英学史』名著普及会 昭和57年 pp. 284-285  
<sup>17</sup> 石原千里2001年 p. 158  
<sup>18</sup> 石原千里2001年 pp. 20-21  
<sup>19</sup> 長崎三一教会史編集委員（編）『長崎聖公会略史』長崎三一教会1971年 p. 2  
この本の口絵部分には、J. リギンズと C. M. ウィリアムズの住んだ「聖寿山崇福寺諸堂 配置」図がある。  
<sup>20</sup> 高谷道男（編・訳）1978年『前掲書』pp. 19-20（1860年1月14日付 アイザック・フェリス宛）  
<sup>21</sup> 高谷道男（編・訳）1965年『前掲書』p. 17（1859年11月3日付アイザック・フェリス宛）  
高谷道男（編・訳）1978年『前掲書』p. 21（1860年1月14日付 アイザック・フェリス宛）  
<sup>22</sup> フレデリック・ウェルズ・ウィリアムズ著 宮澤真一訳『清末・幕末に於ける S・ウェルズ・ウィリアムズ 生涯と書簡』高城書房2008年 pp. 328-329  
Williams, Frederich Wells, *The Life and Letters of Samuel Wells Williams, LL.D.: Missionary, Diplomatist, Sinologue*, G.P. Putnam's Sons, 1889, pp. 284-285  
<sup>23</sup> 作家三浦綾子は小説『海嶺（上）（中）（下）』を書いた。（『週刊朝日』1978年10月13日号～1980年10月24日号連載、昭和61年角川文庫）映画監督貞方久は1983年に映画化をした。（岩吉：西郷輝彦 松竹137分）  
都田恒太郎著『ギュツラフとその周辺』教文館 1978年 pp. 191-223  
<sup>24</sup> 村瀬正章著『池田寛親自筆本「船長日記」を読む—督乗丸漂流記—』生山堂書店平成17年  
<sup>25</sup> ギュツラフ訳の聖書は現在、次の書籍が利用できる。  
1. 日本聖書協会（編）『ギュツラフ訳ヨハネによる福音書—現代版、語句の解説つき抜粋朗読 CDつき』日本聖書協会2006年  
2. 笹淵友一（編）『近代日本キリスト教文学全集15 聖書集』教文館 1982年 pp. 11-18  
<sup>26</sup> フレデリック・ウェルズ・ウィリアムズ著 宮澤真一訳『前掲書』p. 94  
Williams, Frederich Wells, *The Life and Letters of Samuel Wells Williams*, pp. 83-84  
<sup>27</sup> フレデリック・ウェルズ・ウィリアムズ著 宮澤真一訳『前掲書』p. 106  
Williams, Frederich Wells, *The Life and Letters of Samuel Wells Williams*, pp. 93-94  
<sup>28</sup> 例えば、1860年10月16日付フィリップ・ベルツ師宛の手紙には、「通信は、上海オリファント商会または E. W. サイル師気付で日本、長崎に送って下さい。」とある。  
<sup>29</sup> Lazich, Michael C. American Missionaries and the Opium Trade in Nineteenth-Century China, *Journal of World History*, Vol. 17, No. 2 University of Hawaii Press, 2006, pp. 197-223  
<sup>30</sup> 豊原治郎 「“Augustine Heard & Co.と Olyphant & Co.” 一米中海運史研究の一節—」追手門経済論集 第 XXV 巻第 1 号 pp. 14-15  
<sup>31</sup> 園田節子「まぼろしのペルー・中国間太平洋横断汽船行路——1878年ペルーシア号事件と苦力貿易論議」『アメリカ隊へよう研究 3』東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域センター 2003年 pp. 131-146  
<sup>32</sup> フレデリック・ウェルズ・ウィリアムズ著 宮澤真一訳『前掲書』pp. 86-87  
Williams, Frederich Wells, *The Life and Letters of Samuel Wells Williams*, p. 78  
<sup>33</sup> 高谷道男（編・訳）1978年『前掲書』pp. 22-23（1860年1月14日付 アイザック・フェリス宛）  
<sup>34</sup> 国立公文書館デジタル資料「公文書のみる日本のあゆみ」[http://www.archives.go.jp/ayumi/kobetsu/m06\\_1873\\_02.html](http://www.archives.go.jp/ayumi/kobetsu/m06_1873_02.html)（2013年9月1日）  
<sup>35</sup> 高谷道男（編・訳）1965年『前掲書』p. 21（1859年11月3日付アイザック・フェリス宛）  
Reginald Heber, (1783-1826)  
<sup>36</sup> 沼田次郎 荒瀬進訳『ボンベ日本滞在看聞録』新異国叢書10 雄松堂書店 昭和43年 pp. 272-273  
<sup>37</sup> ワシントン・アーヴィングの『スリーパー・ホローの伝説 故ディートリッヒ・ニッカボッカーの遺稿より』を指している



- と思われる。Washington Irving: 1783-1859 *The Legend of Sleepy Hollow*, 1820
- <sup>38</sup> G. D. レーマン著 峠口新訳『西日本伝道の隠れた源流 ヘンリー・スタウトの生涯』新教出版社1986年 pp. 26-28 (1869年6月21日付 伝道局書記宛)
- <sup>39</sup> ハーマン・メルビル著 磯野宏訳『白鯨』集英社ギャラリー〔世界の文学〕16 アメリカ I 集英社1991年 p. 123
- <sup>40</sup> 川澄哲夫著『黒船異聞 日本を開国したのは捕鯨船だ』有隣堂 2004年 p. 16
- <sup>41</sup> ハーマン・メルビル著 磯野宏訳『前掲書』p. 209
- <sup>42</sup> ハーマン・メルビル著 磯野宏訳『前掲書』p. 134
- <sup>43</sup> 作家吉村昭は『海の祭礼』でロナルド・マクドナルドを描いた。文芸春秋 昭和61年
- <sup>44</sup> Griffis, William Elliot, *The Rutgers Graduates in Japan, An Address Delivered in Kirkpatrick Chapel, Rutgers College, June 16, 1885, Revised and Enlarged and Republished at the 150th Anniversary of the College, Rutgers College, New Brunswick, New Jersey, 1916*
- <sup>45</sup> 井川直衛 (編)『東山五拾年史』東山学院 昭和8年
- <sup>46</sup> Laman, Gordon D., *Pioneers to Partners* Wm.B.Eerdmanns Publishing Company、2012, pp.645-650
- <sup>47</sup> Laman, Gordon D., op. cit. Preface pp. xxii-xxiii